

タイトル	富と貧困について：ヘーゲルとマルクス
著者	美馬，孝人；MIMA, Takato
引用	季刊北海学園大学経済論集，61(4)：59-80
発行日	2014-03-30

《論説》

富と貧困について

— ヘーゲルとマルクス —

美 馬 孝 人

1, ヘーゲルの方法と『法の哲学』

ヘーゲルは『精神現象学』の序論に、「真理が現実存在するためにとりうる真の形態は、学問としての体系のほかにはない。……現実的な知識になるという目標に哲学を近づけること、この仕事に寄与しようというのが私の目指すところである」（ヘーゲル『精神現象学』山本信訳（『世界の名著 35・ヘーゲル』中央公論社）92 ページ）と述べている。そして本書の構想について、「私の見解の正否は体系そのものの叙述を通じて示される以外にないのであるが、とにかく私の見るところでは、すべてはかかって次の点にある。すなわち、真なるものを、実体としてばかりでなく、まさに主体として把握し表現すること、これである」（同上、101 ページ）。

精神のより高い段階での自己諒解への過程を明らかにし、それを叙述しようとするヘーゲルは、哲学的認識が精神の生成の過程全体を体系的に示すものでなければならないとする。哲学は、認識の弁証法的展開を叙述し終えた時、初めて精神の本質たる絶対者をとらえることができると言うのである。「真なるものは全体である。そして全体とは、自分を展開することによって自分を完成してゆく実在に他ならない。絶対者については、それは本質的に結果であり、終わりにおいてはじめて、それが真にあるところのものになる、と言わなければならない。現実的なものであり、

主体であり、自己生成であるという、絶対者の本性は、まさにこのことにおいて成り立つ」（同上、102 ページ）。

意識において、自我と、その対象になっている実体との間には不同が生じ、それは両者の欠陥ともみなされうるが、実は両者の魂であり、それらの運動を生じさせるものに他ならない。ここに見られる否定的なものは、実体が本質的に主体であることを示している。「このことが完全に示されるにいたったときに、精神は、それまで意識の諸形態であったところの自分の現存在を、それまで対象としてあったところの自分の実在と、同じものたらしめることになる。そのときには精神は、そのあるがままに自分の対象であり、そこでは直接性や、知識と真理との分離という、抽象的なエレメントは克服されている。存在は絶対的に媒介されており、実体的な内容であると同時に、とりもなおさず自我の所有であり自己的であり、要するに概念である。ここにいたって精神現象学は完結する。」（同上、116 ページ）。

『エンチクロペディー』においてその哲学体系を完成したヘーゲルは、第3部・「精神哲学」の第2編・「客観的精神」の部分で『法の哲学』においてさらに詳細に展開した。『法の哲学』は第1部・「抽象的な権利ないし法」、第2部・「道徳」、第3部・「倫理」から構成されている。この構成は「道徳」を最高位におくカントを克服するものであることを

示すとともに、「法」なるものの本質を明らかにするための弁証法的認識の方法を現している。そして第3部・「倫理」の構成を見ると、第1章・「家族」、第2章・「市民社会」、第3章・「国家」とされていることから明らかに、国家は「倫理」の世界において最高の地位を与えられており、家族や市民社会が内包する諸矛盾に最終的な解決を与えるものとされている。

これは、ヘーゲルが考えるあるべき国家において現実的となる、個別的人間と彼らが所属する社会との真の統一という人倫のあり方を示すものであり、必ずしも現存するプロイセン国家を肯定するものではなかったとはいえ、たしかにヘーゲルは「国家の立憲君主制への成熟は、実体的理念が無限の形式を獲得した近代世界の業績である」として、「君主権」を「最終意思決定としての主体性の権力」と公言し（ヘーゲル『法の哲学』藤野渉・赤澤正敏訳（『世界の名著35・ヘーゲル』）520ページ）、フランス革命後の社会的・政治的混乱の理性的な決着をプロイセン国家に期待したのであった。このようなヘーゲルの法哲学体系への批判が各方面からわき上がるのは当然であった。わがマルクスのヘーゲル批判もまた彼の『法の哲学』第3部・第3章・A・「国内公法」への批判から始まった。

1843年の夏に書かれた『ヘーゲル法哲学の批判のために』の残存草稿（マルクス『ヘーゲル国法論批判』真下信一訳（『ヘーゲル法哲学批判序論』国民文庫、所収））を見ても、マルクスは精神の展開として市民社会から国家を創出するには無理があること、また現存する国家とその実体が「自由な精神の現実化」などではないことを痛烈に批判している（同上、100ページ）。マルクスのヘーゲル国家論に対する詳細な批判は法学・政治学の視点からも学ぶべき点が多いし、ヘーゲルの弁証法が多く箇所で詭弁に墮していることを論証している点も見事であるが、われ

われにとってさしあたり重要なのは、エンゲルスの次の指摘である。「ヘーゲルの法哲学に関連してマルクスは、ヘーゲルによって『建造物の戴く輝ける王冠』として描かれた国家ではなくてむしろ彼によってあれほど継子扱いにされた『市民社会』こそが、人類の歴史的発展過程を理解する鍵がそこに求められるべき領域なのである、という洞察に達した」（同上、353ページから引用）。

2, ヘーゲルの市民社会論

「真なるものを実体としてばかりでなく、まさに主体として把握し表現」しようとするヘーゲルは、『法の哲学』の中で市民社会をどのように扱っているであろうか。ヘーゲルが政治的・経済的先進国である英国のジェームズ・スチュアートやアダム・スミスの、いわゆる国民経済学から大きな影響を受けたことはすでに周知のところである。ヘーゲルは彼らの経済学の成果を援用しながら市民社会が自由で独立した個々人の結びつきの体系であること、あるいは利己的な欲求のかたまりとしての個々人の経済的な相互依存関係であることを、肯定的に巧みに表現している。

「特殊的人格として自分が自分にとって目的であるところの具体的人格が、もろもろの欲求のかたまりとして、また自然必然性と恣意との混合したものとして、市民社会の一方の原理である。——ところが特殊的人格は、本質的に他人のこのような特殊性と関連している。したがってどの特殊的人格も、他の特殊的人格を通じて、そしてそれと同時に、まったく普遍性の形式というもう一方の原理によって媒介されたものとしてだけ、おのれを貫徹し満足させるのである。……利己的目的は、おのれを実現するに当たってこのように普遍性によって制約されているために、全面的依存性の体系を設立する。この依存性は、個々人の生計と福祉と法的現存在が、万人の

生計と福祉と権利とのなかに編み込まれ、これらを基礎とし、この繋がりにおいてのみ現実的であり保障されている、というほどに全面的な依存性である。——この体系はさしあたり外的国家、——強制国家および悟性国家とみなすことができる」(ヘーゲル『法の哲学』藤野・赤澤訳(『世界の名著35・ヘーゲル』)413-4ページ)。

諸個人はこの外的国家の市民として、自分の独自利益の最大なることを計ろうとしているが、それを達成するためにはおのれの直接的な欲望を押さえて、かえって普遍的な利益に従うという回り道をしなければならない。つまり市民社会の諸個人は自らの「欲求の恣意」を「知と意思の働きと行動とを普遍的な仕方と規定し」(同上、419ページ)普遍性へと高めていくことになるが、ヘーゲルによれば、それは「彼らの特殊性のなかの主観性を陶冶する過程である」。精神の自由はこうしてその外面性において現存在を持つのであって、「精神は自由たるべきその使命にとって即自的には異郷であるところのこの外面性の境地において対自的になる……このようにしてこそ、普遍性の形式は対自的に思想という形をとって顕現するにいたる」(同上、420ページ)というのである。

「だから陶冶としての教養とは、その絶対的規定においては解放であり、より高い解放のための労働である。すなわちそれは、倫理のものは直接的でも自然的でもなくて精神的であるとともに普遍性の形態へと高められた無限に主体的な実体性へ到達するための、絶対的な通過点なのである。……陶冶としての教養のこの労働によってこそ、主観的意思そのものがおのれのうちに客観性を獲得するのであって、この客観性においてのみ、主観的意思はそれなりに理念の現実性たるに値し、理念の現実性たりうるのである。」(同上、420ページ)。

特殊性としての諸個人は、おのれを陶冶す

るための労働によっておのれを作りかえ高めあげてこそ普遍性の形式を手に入れることができるのであり、その過程を通じて真の個別性を確立する。その個別性は普遍性に充たされているがゆえに倫理のうちに自由な主体性として存在している、というわけである。ヘーゲルはこの部分に注をつけていわく。「教養ある人といえはさしずめ、他人が為すことは何でもすることができるが、自分の個人的特殊性はひけらかさないような人と解することができる。ところが無教養の人にあつては、その動作が対象の普遍的性質に則っていないから、とりもおさずこの個人的特殊性が出てくる」と。(同上、421ページ)。

市民社会は、自立しつつ己れの欲求を充たそうとする各人が、不可分離に結びつきながら自分を陶冶し、教養を積み、労働を通じておのれを普遍的人間へと高め、社会の中で自由な主体となろうと努力する人間存在の場である。彼らの能動的で全面的な結びつきは相互に利益を与え合う見事な体系であつて、「悟性国家」と呼ぶにふさわしいものである。市民社会は三つの契機を含む。「A、個々人の労働によって、また他のすべての人々の労働と欲求の満足とによって、欲求を媒介し、個々人を満足させること——欲求の体系。

B、この体系に含まれている自由という普遍的なものの現実性、すなわち所有を司法活動によって保護すること。

C、右の両体系の中に残存している偶然性に対してあらかじめ配慮すること、そして福祉行政と職業団体によって、特殊的利益を一つの共同体的なものとして配慮し管理すること」(同上、421ページ)。

こうして市民社会は一見すると、自由な個々人が主体的に合理的な体系を構成しているそれ自体で自己完結的な姿に見える。しかしながら市民社会における「所有と人格的自由との安全と保護」(同上、480ページ)は倫理的な実体として現れているとはいえ、未

だ無意識的な必然性の結果であり、それぞれの目的は制限されている。他方で陶冶としての教養のうちにある普遍性の形式は、精神に「法律と制度という、おのれの思惟された意志の形」とらしめ、市民社会は倫理的理念の現実性としての国家に移行せざるを得ない、と展望されている。(同上、478ページ)。

3. ヘーゲルにおける富と貧困

ところで、ここにたびたび姿をあらわす労働とは、抽象的精神的な労働と現実的な対象的労働が微妙に絡まりあっているのであるが、ここ市民社会論の展開の中では後者のほうが主流になっているようである。市民社会における労働は、分業によってしだいに単純化し、それによって生産力を高めて外的な享受対象を豊富に生み出し生計を豊かにするとともに、各種の労働技能をも高めて道具や機械を作り出し人間を労働から解放する道を開く。この過程はまた人々の相互依存関係をいっそう緊密で不可分なものにし、各人は自分の利益を図りながらも同時に普遍的な利益にも貢献する体制を作り上げてゆく。市民社会における各成員による分業の発展は、彼らにとって普遍的な資産を維持し増大させるのである。ヘーゲルの言うところを聞こう。

「労働における普遍的で客観的な面は、それが抽象化してゆくことにある。この抽象化は手段と欲求との種別化をひきおこすとともに、労働の分割(分業)を生み出す。個々人の労働活動はこの分割によっていっそう単純になり、単純になることによって個々人の抽象的労働における技能も、彼の生産量もいっそう増大する。

同時に技能と手段とのこの抽象化は、他のもろもろの欲求を満足させるための人間の依存関係と相互関係を余すところなく完成し、これらの関係をまったくの必然性にする。生産活動の抽象化は、労働活動をさらにますます

す機械的にし、こうして遂に人間を労働活動から解除して機械をして人間の代わりをさせることを可能にする。」(同上、428-9ページ)。

この文章の次に『C資産』と題されて以下の文章が続いている。「労働と欲求の満足とが右のように依存的相互的であるところから、主観的利己心は、すべての他人の欲求を満足させるための寄与に転化する、——すなわち特殊なもの^をを普遍的なものによって媒介するはたらきに転化する。主観的利己心が弁証法的運動としてのこうした媒介のはたらきに転化する結果、各人は自分のために取得し生産し享受しながら、まさにこのことによって他の人々の享受のために生産し取得することになる。

万人の依存関係という全面的からみ合いの中に存するこの必然性が今や、各人にとって普遍的で持続的な資^{フエアメーゲン}産なのであり、各人は自分の教養と技能によってこれに参加してその分配に預かり、自分の生計を安全にする可能性を与えられている。——それとともに他方ではまた、各人の労働によって媒介されたこの取得が、普遍的資産を維持増大するのである」(同上、429-30ページ)。

ヘーゲルが市民社会論の中で展開しているのは、このような普遍的資産の増大とともに、人間の欲求がもつ特殊な性質である。動物の欲求は制限されており、それを満足させる手段や方法も制限されているのに対して、人間はこうした自然への依存状態にありながらもしだいにその依存状態を抜け出してゆく。それは第一に、欲求と手段とを多様化することによって、第二に、具体的欲求を分析して色々な部分と側面に区別し分割して、より特殊な抽象化された欲求とすることによってである。

「人間には住居と衣服に対する欲求があり、また食物をもはや生のままにしておかないで、適当に調理し、その自然的直接性をこわさな

ければならない必然性がある。こうした欲求と必然性からして、人間は動物のように安閑と暮らすわけにはゆかず、精神としても安閑とかまえていることは許されない。もろもろの区別を把握する悟性は、これらの欲求を多様化するし、また趣味と効用が評価の基準になることによって、欲求そのものもまた趣味と効用によって動かされている。こうしてついに、満たされなければならないものは、もはや必要ではなくて意見ということになる。そして具体的なものをもろもろの特殊な面に分割することこそ、まさに文化の一面なのである。」(同上, 424 ページ)。

特殊化され抽象化された多様な欲求も、それを満たす手段・方法もまた、さらに部分化され多様化して無限に進行するが、それは「洗練化」である。抽象化された欲求と手段と満足の方法は自他において相互的であることから社会的承認を受け、諸個人は特殊性とともに同等性の欲求をも身につけて、さらに欲求を拡大してゆく。

「社会的欲求には、直接的あるいは自然的な欲求と表象が求める精神的欲求とが結びついているが、社会的欲求においては後者が普遍的なものとして重きをなすものとなるから、この社会的契機の中には、自然必然性からの解放の面がある。すなわち欲求の厳しい自然必然性は隠されて目立たなくなり、人間はおのれの意見、そのうえ社会一般の普遍的意見、つまり人間がみずから作ったにすぎない必然性に従ってふるまい、たんに外面的偶然性や内的偶然性である恣意に従ってふるまうのではないという面がある」(同上, 426 ページ)。

こうして人間はしだいに自然必然性から解放され、人間特有の欲求を発展させその満足の達成にかたむいていくとはいえ、人間が発達させる社会的欲求には限界がない。市民社会の基礎には依然として個別的な特殊性が存在するからである。「もろもろの欲求や手段

や享楽をとめどなく多様化し種別化する社会的趨勢には、自然的欲求と文化的欲求との差異と同じように限界がない。この社会的趨勢は——一方では奢侈である。しかし他方では……依存と窮乏との同じく無限な増大化である」(同上, 426-7 ページ)。

ヘーゲルは国民経済学に学び、国民経済学の立場に立って、自由な個々人の利己的な行動の絡み合いが普遍的な資産の増大をもたらすこと、また人間の欲求が自然への依存から解放されて無限に拡大していくことを明らかにするのであるが、それに参与し、配分にあずかる仕方は各人で違っている。その違いが農業身分、商工業身分、普遍的身分の区別を作り出し、それらの身分がまた国家の出現を要請するというのである。

「普遍的資産に参与してその配分にあずかる仕方方法は、諸個人それぞれの特特殊性に委ねられているが、しかし市民社会の特殊化に一般的相違があるのは必然的なことである。

国家の第一の土台が家族であるのに対して、身分は第二の土台である。この第二の土台がかくも重要なのは、私的人格は利己的であるにもかかわらず、他人のことを顧みざるをえないという必然性をもっているためである。それゆえここに、利己心が普遍者たる国家に結びつく根があるのであり、この繋がりをついていっそう堅実で堅固なものにすることこそ、国家の配慮せねばならないことなのである」(同上, 431 ページ)。

ヘーゲルは最終的には国家のなかに、国法に基づく人倫的理想を見出そうとするのであるが、それゆえにこそ市民社会が固有の解決しがたい矛盾をもっていることを見逃しはしなかった。スミスの発展的社會を念頭に置きながらヘーゲルは次のように言っている。

「市民社会が妨げられることのない活動状態にあるときは、市民社会はそれ自身の内部で人口と産業との発展途上にある。——人間のもろもろの欲求を通じて人間の連関が普遍

化することによって、またこれらの欲求を満たす手段を作製調達する方法が普遍化することによって、富の蓄積が増大する。というのはこの二重の普遍性から最大の利得が得られるからである。——しかしこれは一面であり、他面では特殊労働の個別化と融通の利かなさが増大するとともに、この労働に縛り付けられた階級の隷属と窮乏とが増大し、これと関連してこの階級は、その他のもろもろの能力、特に市民社会の精神的な便益を、感受し享受する能力を失う」(同上、468-9ページ)。

ヘーゲルはすでに、市民社会において普遍的資産に参与する可能性は誰にでも与えられているとはいえ、各人には相違があるうえその可能性は彼らのもつ技能、健康、資本などを前提しているから、偶然的にそれらを欠く者は貧困に陥ると述べている。「貧困状態は、諸個人が市民社会のもろもろの欲求をもつことを妨げはしないが……諸個人からあらゆる社会的便益を奪う」と(同上、467-8ページ)。ヘーゲルが問題にするのは、スミスと同じく無産貧民あるいは労働者のことと考えられるが、特に重要視しているのは労働階級の底辺部分に必ず見られる窮民あるいは賤民の発生であった。

「市民社会の成員に必要な生計の規模はおのずから決まってくるが、大衆がこの一定の生計規模の水準以下に零落するということは……賤民の出現をひきおこす。「貧困それ自身は、何びとをも賤民にしはしない。賤民は、貧困に結びついている心術によって、すなわち富者や社会や政府などに対する内心の叛逆によって、はじめて賤民として規定される。さらにこうした心術の結果、人間は偶然だけを頼りとするために、軽佻浮薄になり、労働ぎらいになる」(同上、469ページ)。

賤民は生計の資を自分の労働によって入手しようとする誇りはもっていないのに、それを権利として要求するという悪弊が生じてい

る。どんな人間も自然に対しては権利を主張することはできないが、社会に対しては貧困をみずからに加えられる不法として告発することができる。このことから「いかにして貧困を取り除くべきかという重大問題こそ、とりわけ近代社会を動かし苦しめている問題なのである」とヘーゲルは言っている(同上、470ページ)。そして労働者の貧困という重大問題は市民社会に深く内包されており、それ自身のなかでは解決できないことを次のように述べるのである。

「貧困に陥ろうとしている大衆を助けて、彼らなりのちゃんとした生活様式を続けさせるための直接の負担が、富んでいる階級のほうに課せられるか、あるいはそのための直接の手段が、仮に他の公的所有〔富裕な公営病院、慈善施設、修道院〕のうちにあるとすれば、窮民の生計は労働によって媒介されることなくして保障されることになるであろう。しかしこのことは市民社会の原理に、すなわち市民社会の諸個人の自主独立と誇りの感情という原理に反するであろう。——そこで今度は彼らの生計を労働によって〔労働の機会を提供することによって〕媒介するとすれば、生産物の量が増えることになるであろう。そうすると、一方では生産物があり余り、他方ではこれに釣り合った〔それ自身生産者である〕消費者が不足するということになるのであって、これがとりもなおさず禍の本質である。そしてこの禍は、前の直接的方法によっても、後の間接的方法によっても、ただ増大するばかりである。ここにおいて、市民社会が富の過剰にもかかわらず十分には富んでいないことが、すなわち貧困の過剰と賤民の出現を防止するに足るほど持ち前の資産を具えてはいないことが暴露される。これらの現象は、大規模のものとしては、イギリスの実例で学ぶことができる。……」(同上、470ページ)。

ヘーゲルは市民社会における欲求の経済が

不可避的に内包する基本的な不合理性をこのように描き出し、そこから福祉行政や職業団体、あるいは植民地の必要性や必然性を導き出すのであるが、最終的には国家にその矛盾の解決を委ねることになるのである。

4. マルクスのヘーゲル哲学批判

マルクスは『1844年の経済学・哲学手稿』の序言にヘーゲル哲学の批判を予告し、残された手稿の最後の部分で、それを全面的に展開して見せている。それは「ヘーゲル哲学の眞の生誕地であり秘密である」ところの『精神現象学』各項目の批判的分析であって、自己意識、精神、宗教、絶対知にまで及んでいるが、ヘーゲルが富や貧困、不自由や権力等々を人間的なあり方からの疎外態と捉えているにもかかわらず、その回復をたんに抽象的な思考形式の中でだけ行なっているにすぎないこと、またこの徹底した「観念論」が、批判的で否定的な外観にもかかわらず彼の哲学を現状追認の「実証主義」に陥らせているというものであった。それにもかかわらずわれわれが学ぶべきは、マルクスによる次の要約であろう。

「ヘーゲル『現象学』とその最終成果——動かし産み出す原理としての否定性の弁証法——における偉大なものは、かくて第一には、ヘーゲルが人間の自己産出をひとつの過程としてとらえ、対象化を対象性剥奪として、外在化として、およびこの外在化の止揚としてとらえるということ、したがって彼が労働の本質をとらえ、対象的な人間を、現実的なるがゆえに真なる人間を、人間自身の労働の成果として把握するということにある。人間が類的存在としての自分に対してとる現実的な、能動的な態度、あるいは、人間がひとつの類的存在としての、すなわち人間的存在としての実を示すことは、ただ次のことによるのみ可能である。すなわち人間が現実的に

そのすべての類的諸力を外へ出すこと——これはまた人間達の総活動によるのみ、歴史の成果としてのみ可能であるのだが——によるものであり、そしてそれら〔外へ出された類的諸力〕に対して、対象に対してのようによふるまうこと——これはまたこれでさしあたり疎外の形式においてのみ可能なのだが——によるものである」(マルクス『1844年の経済学・哲学手稿』真下信一訳(邦訳全集40巻)496ページ、また藤野渉訳『経済学・哲学手稿』国民文庫をも参照して訳文にとり入れた)。

マルクスはまた『ドイツ・イデオロギー』の「まえがき」にも次のようなメモを残している。「ヘーゲルは積極的観念論を完成していた。たんに彼にとって全物質の世界が思想の世界に、そして全歴史が思想の歴史に変えられていただけではない。彼は思想物を記録するだけでは満足せず、生産行為をも叙述しようとする」(マルクス『ドイツ・イデオロギー』真下・藤野・竹内訳(邦訳全集3巻)12ページ)と。

こうしてマルクスは、一方では、ヘーゲルの「客観的精神」が精神的抽象的労働をつみ重ねて自己のもとに復帰し現実性となる、とする神秘的な形であるとはいえ、ヘーゲルが対象あるいは実体を、外在化した「主体」そのものとして概念把握し、現実的な人間の自己産出過程を総括したことを高く評価し、他方では、ヘーゲル哲学の精神主義を徹底的に批判してみずからの方法を確立したのであった。

後年、マルクスは次のように語っている。「私の弁証法的方法は、根本的にヘーゲルのものとは違っているだけではなく、それとは正反対なものである。ヘーゲルにとっては、彼が理念という名のもとに一つの独立な主体にさえ転化させている思考過程が現実的なものの創造者なのであって、現実的なものはただその外的現象をなしているだけなのである。

私にあっては、これとは反対に、観念的なものは、物質的なものが人間の頭の中で転換され翻訳されたものに他ならないのである。……弁証法がヘーゲルの手の中で受けた神秘化は、彼が弁証法の一般的な諸運動形態をはじめて包括的で意識的な仕方ですべてのことを、決して妨げるものではない。弁証法はヘーゲルにあっては頭で立っている。神秘的な外皮の中に合理的な核心を発見するためには、それをひっくり返さなければならないのである」(『資本論』第1巻、第2版後記、国民文庫版①、40-1ページ)。

若きマルクスは、ヘーゲル哲学の批判によって獲得した、その研ぎ澄まされた武器を携えてヘーゲル市民社会論の実質的な内容をなしていた国民経済学の批判へと進み、さらに人間の類的諸力が歴史的な成果として外部に生み出した資本主義経済社会の分析に取りかかったのであった。

第一手稿の「労賃」の部分では、国民経済学が一方では労働を富の源泉としているのに、他方では労働者には貧困しか与えないことを原理としていると指摘し、そうである限り資本家、地主と労働者の敵対関係がますます深まってゆくことをヘーゲル的な用語を用いながら明らかにしている。

「分業は労働の生産力、社会の富と洗練を高めるのに、それは労働者を機械にまで零落させる。労働は諸資本の累積、したがってまた社会の繁栄の増大をもたらすのに、それは労働者をますます資本家に依存するものにさせ、いっそう激しい競争へ連れ込み」、過剰生産恐慌を起こして労働者を失業させる(マルクス『1844年の経済学・哲学手稿』(邦訳全集40巻)395ページ)。

「国民経済学がプロレタリア、すなわち、資本も地代もなしに純粋に労働、それも一面的、抽象的な労働でのみ生きる人間をただ労働者としてだけ見ているというのは自明のことである。それゆえに国民経済学は、労働者

はあらゆる馬と同様、働くことができるだけのものを得なければならぬという命題を立てることができる。それは労働者を彼が仕事を持たない時において、人間として見ることはしないで、この見方を、刑事裁判所、医者、宗教、統計表、政治そして乞食係りの巡査に委ねるのである」(同上、396ページ)。

それでは、労働者を生産の道具としてしか見ていない一面的で非人間的な「国民経済学の水準以上へ出て」、分業や生産力の発展を考えるとすれば、それらは人類の発展にどのような意義をもつのであろうか。当時、資本主義経済の生成期にあったドイツにおいても、すでに様々なかたちで社会主義・共産主義の諸学説が人々の関心を集めるようになり組織的な運動も始まっていたが、マルクスは社会主義的政論家シュルツの『生産の運動』(1843年刊行)を引用している。

「国民が精神的に一層自由になっていくためには、もはやその身体的欲求に隷属してはならず、体の奴隷であってはならない。精神的に創造し精神的に享受することもできるような時間がその国民になければならない。労働の組織におけるこの進歩はこの時間を生むのである。何といたって今日では、新しい諸動力と改良された機械類のおかげで、たった一人の労働者が木綿工場において100人、いや250-300人の以前の労働者たちの仕事をやり遂げることも稀ではない。同じような結果は生産のあらゆる部門に見られる。というのは外的自然力がますます多く人間の労働への参与を強いられるからである。さて以前ならばある量の物質的必要を満たすのに要した時間と人力の消費が後では半分だけ減ったとなれば、それと同時に、感性的快感を少しもそこなうことなしに、精神的な創造と享受のための余地がそれだけ広がったことになる」(同上、397-8ページによる)。

労働の生産力と機械類の発展は、シュルツが明らかにしているように人間の身体的欲求

を満たし、さらに彼等を労働から解放して自由時間をもたらし、人間の生活に物質的精神的余裕を与えるはずである。それなのに、それが正反対になっているのはなぜか。マルクスはフランスの空想的社会主義者ペクルを引用してその原因を示唆する。「生きるために無産者は直接的にか間接的にかわが身を有産者の用に立てること、換言すれば、彼らに従属することを余儀なくされている。……自分の労働を貸す……他人に代って働く……この経済の仕組みは否応なしに人々をまことにあさましい職業につかせ、まことに痛ましくもむごい墮落へおとしめずにはおかない」(同上、399-400 ページ)。

またスミスの文章を引用した後に言う。「資本は労働とその生産物に対する支配力である。資本家はこの力を持つが、それは、彼の人格的あるいは人間的性質のおかげによってではなくて、彼が資本の所有者である限りにおいてである。何者もさからいがたい彼の資本の購買力が彼の力なのである。」(同上、403 ページ)。

マルクスは国民経済学の批判的研究を通して、個々人が政治的に自由で独立しており相互に全面的に依存しあっているように見える市民社会が、ヘーゲルの言う「欲求の体系」として未曾有に物質的富を増大させている反面で、実は資本家が貨幣と利潤を得るために労働者を従属下におき労働を強要している、疎外された物的な生産関係であることを把握していくのである。

「われわれは国民経済的な、現にある事実から出発する。労働者は富を生産すればするほど、彼の生産が力と広がりを増せば増すほど、それだけ貧しくなる。労働者は商品を作れば作るほど、それだけ安価な商品となる。物の世界の価値化に正比例して人間の世界の非価値化は進む。……この事実は何をあらわしているのか。それは、労働が生産するところの対象、労働の産物は労働に対して一つの

異物として、生産者からは独立な一つの力として対峙してくるということに他ならない。労働の産物はある対象のうちに定着し、物的となった労働であり、労働の対象化である。労働の現実化はそれの対象化である。労働のこの現実化は国民経済的状况においては労働者の現実性の喪失、対象化は対象の喪失および対象への隷属、そして獲得は疎外として、手放すこと [外在化] としてあらわれる」(同上、431-2 ページ)。

さらに言う。「労働者は彼の産物のなかで自己を外在化するが、このことの意義はただ単に彼の労働が一つの対象、一つの外的な存在になるところにあるだけでなく、彼の労働が彼の外に、彼とは独立に、余所者として存在し、そして彼に対峙する一つの自立的な力となり、彼が対象に貸与した命が彼に余所者となって敵対してくるところにある」(同上、432 ページ)。

労働の生産物は労働者の外に、対象物として外的な存在となるばかりではなく、それらは資本家の所有物となって労働者に対峙し、労働者を支配してより多くの労働を強要するものになる、というのである。自分の労働が自分の外に生み出したものが、自分に敵対し、自分を支配するものになる、というのはどういうことか。ここにヘーゲルの「対象化を対象化行為として、外在化として、およびこの外在化の止揚としてつかむ」否定性の弁証法が有効性を発揮する。人間の本質の対象化、あるいは外在化を人間的発展のための不可欠の契機としながらも、同時にそれを本質の否定態と規定し、それをもう一度主体の中に取り戻すことこそ真の人間的发展であると捉えられているからである。実践的主体である労働者にとって「人間的存在者としての自己の証示」は、外部に生み出されている労働活動の成果が資本家の所有となっている現状を止揚し、労働者とその労働の成果を己の享受と発展のために利用する体制を取り戻すことに

よってなし遂げられるのである。

しかしその前に、国民経済学が一面的に富の合理的な生産体制として分析してみせた資本主義社会は、ヘーゲルが自己意識の運動という神秘的な形で明らかにしてみせた労働を媒介とする人間の自己産出過程の中において見た場合、どのような位置をしめ、またどのような意義をもつのかということが、問われなければならなかった。

5、疎外された労働

「真なるものを実体としてばかりでなく主体として把握する」ヘーゲルの弁証法的方法は、マルクスによって鍛えなおされ、まず国民経済学の批判に適用された。マルクスの課題は、現実的に対象物として存在している富を主体的な人間労働の成果として把握するとともに、それが資本の所有となり労働者を支配し窮乏化させる力に転化する必然性とその意義を解明して、そこに内包されている自己否定的諸契機を明るみに出すことであった。

若きマルクスは、この段階ではまだ国民経済学の諸概念の批判的分析に着手したばかりであり、商品、貨幣、資本、地代、利潤、利子等々として実体的に存在する富やそれを生み出す生産関係の歴史的意義や役割を解明していなかった。とはいえヘーゲル哲学批判直後におけるこの時期の、「人間の自己産出活動」の過程を確認していこうとする作業、より具体的には、主体的人間労働を中心においてもろもろの経済的実体を労働の対象化としてとらえなおそうとするまともな方法は、かえって国民経済学が無意識のうちに隠そうとした経済活動の一面的で非人間的な諸特徴を明るみに出すことになった。そこには国民経済学に対する冷静な分析よりも人間的な本質を回復しようと熱望する革命家的な怒りの感情が前面に出ている感があるのであるが、ヘーゲルが哲学的に確立した人間第一主義を

「現実化」していこうとする情熱とそのため鋭い論理展開が見られるのであって、そこで獲得された諸成果はもう一度整理し直されて、後年の彼自身の『資本論』を中心とする国民経済学的カテゴリーの批判と資本主義経済の解明のなかにも貫かれていくのである。

より詳細に労働の対象化、労働の生産物、そしてその対象の喪失、労働者の無一物化等を追求した後にマルクスは言う。「国民経済学は労働者(労働)と生産との直接の間柄を見ないことによって、労働の本質のうちにある疎外を隠す。たしかにその通りなのであって、労働は富者のためには素晴らしいものを生産するが、労働者のためには窮乏を生産する。それは宮殿楼閣を生産するが、労働者のためには穴倉を生産する。それは美を生産するが、労働者のためには奇形を生産する。それは労働の代わりを機械にさせるが、しかし労働者たちの一部を野蛮な労働へ追い戻し、そしてその他の部分を機械にする。それは精神を生産するが、しかし労働者のためには低能、白痴を生産する」(マルクス『1844年の経済学・哲学手稿』(邦訳全集40巻)433-4ページ)。

疎外はここでは労働者の労働の産物として、結果としてとらえられているが、労働対象の疎外のうちには労働そのものの疎外が前提としてなければならない。「われわれはこれまで労働者の疎外、外在化を一方側の面についてのみ、つまり労働者の、彼の労働の産物に対するあり方だけを見てきた。しかし疎外はただたんに結果においてのみならず、また生産の行為のうちに、生産的活動そのものの内側にも、見られるのである。もしも労働者が生産の行為そのものにおいて自己から自己自身を疎外することがなかったとすれば、どうして彼は彼の活動の産物に余所者として対立して行くことができようか。……労働の対象の疎外のうちには、労働の活動そのものにおける疎外、外在化が要約されているだけであ

る」(同上, 434 ページ)。国民経済学的カテゴリーを根本的に批判するためには、彼らが問題にもしない「労働の疎外」を明らかにしなければならない。

それではどの点に労働の疎外はあるであろうか。マルクスは言う。

「それは第一に、労働は労働者にとって外的なもの、つまり彼の本質には属さないものであり、それゆえに彼は自らを彼の労働において肯定せずに、かえって否定し、快く感じないで、かえって不安に感じ、どのような自由な肉体的および精神的エネルギーをも発揮することがなくて、かえって彼の肉体を痛め彼の精神を壊すところにある。それゆえに労働者はやっとな労働の外で自分の許に感じ、そして労働の中では自身の外に感じ、彼は労働していないときにアットホームであって、労働しているときにはアットホームではない。それゆえ彼の労働は自由意志的なのではなく、強いられるもの、強制労働である。それゆえにそれは何かの必要を満足させることではなくて、その労働の外にある諸必要を満足させるための一つ的手段であるに過ぎない。……労働者の活動は彼の自己活動ではない。それは他人に属し、彼自身の喪失なのである」(同上, 434-5 ページ)。

マルクスは先の「物の疎外」に対してこの労働そのものの疎外を「自己疎外」と呼び、これら二つの規定から「人間の類的生活からの疎外」と「人間の間からの疎外」を導き出している。それは人類と自然との全面的交流である人間の自由な生活活動を、個々人の生存のための手段に貶めてしまうこと、また労働するものと享受するものとへ人間が分裂し、支配と隷属の関係が作り出されてしまうことである。

国民経済学が無条件に前提している私的所有、あるいは資本家の存在の意味内容は、分析してみれば「疎外された労働」とその結果

であった。ここから二つのことが明らかになる。一つは国民経済学が内包している矛盾、つまり富の源泉であるはずの労働者が貧困のなかにあるということは、疎外された労働の自己矛盾であり、「国民経済学はただ疎外された労働の諸法則を言いあらわしただけである」こと。もう一つは私的所有や奴隷状態からの社会の解放が、「労働者の解放という政治的形態で現れる」ということである。というのも、彼らの解放のうちに一般的人間的な解放が含まれているからであった(同上, 441 ページ)。

それでは疎外された労働の結果として生じてきた私的所有の発展は、真に人間的かつ社会的な所有に対してどのような関係に立つのであろうか。市民社会の基礎をなしていた物質的で感性的な私的所有とは「疎外された経済」であり、「現実的生活の疎外」であった。この経済的疎外の元凶たる私的所有の運動が「欲求の体系」を形づくって普遍的資産を増大させ、教養と技能を洗練させ人間的な欲求を発達させてきた。しかしそれは膨大な物的富を生み出しはしたが、同時に労働者の貧困を条件とするものであり、彼等から市民社会の豊富と便益の享受を奪い去り非人間的な状態に陥っていた。こうして疎外された経済の運動は富を収奪するものと収奪されるものとの間の敵対関係を深めてきたのであった。

したがって人間的自己疎外として発展してきた私的所有の最終的な廃棄は、「人間的な生活の獲得として、それゆえにあらゆる疎外のポジティブな廃棄であり、したがって人間が宗教、家族、国家等々から彼の人間的な、すなわち社会的なあり方へと戻ってくる」ばかりでなく、人間的経済の回復でもあり、また現実的な生活の獲得となる。つまり「この疎外の廃棄は、それゆえに両側面を包括する」(同上, 458 ページ)のであった。

マルクスは発展した私的所有の揚棄としての共産主義について、熱狂的に次のようにも

宣言している。「人間的自己疎外としての私的所有のポジティブな廃棄、したがってまた人間による、また人間のための人間の本質の現実的獲得としての共産主義。したがって、社会的すなわち人間的な人間としての人間の、意識的に、かつ従来の発展のまったき豊かさの内部でなされた、自身に対する完全な還帰としての共産主義。この共産主義は成就されたナチュラリズムとしてヒューマニズムに等しく、成就されたヒューマニズムとしてナチュラリズムに等しく、人間と自然との、人間と人間のあいだの相克の真の解消、現存と本質とのあいだの、対象化と自己確証とのあいだの、自由と必然とのあいだの、個と類とのあいだの、抗争の真の解消である。それは解かれた歴史の謎であって、自らがこの解決であることを知っている」(同上、457 ページ)。

6. 人間の本質の現実化とは

われわれは、経済的疎外の揚棄にかかわるこの魅惑的な一節に受動的に満足することなく、ここで実現されるという真に人間的なあり方の内容について検討を進めよう。

ヘーゲルは『法の哲学』の中で、自由な意志は外的な「物件」を所有することで主体的人格となると述べ、物件の所有は欲求を満たす手段のように見えるが、「真実の立場」は次のようであると言う。「自由の見地からすれば、自分のものとしての所有こそ、自由の第一の現存在として、本質的な目的それ自身なのである。人格的な意志としての、したがって個別者の意志としての私の意志は、自分のものとしての所有において、私にとって客観的となるのであるから、所有は私的所有という性格を得る」(ヘーゲル『法の哲学』邦訳前掲書、241 ページ)。

自由な私的所有者は自分に具わっている肉体的、精神的熟練と活動の可能性を自分の外

部へと生み出して物件とし、「契約」を通じてそれらの物件、外在化した生産物を相互に交換し合う。精神的な産物であっても、それらは「他の諸個人によって把握されて彼らの表象、記憶、思惟等々に、自分のものにされるという定めをも」っており、「外に表す表現によって外に譲渡しうる物件」となる(同上、270 ページ)。

個々人が政治的に自由となり自立化が進んで欲望が解放される市民社会において、私的所有の運動が人間の諸能力を外在化し物件化し、欲望を多様化して労働を分割し、道具と機械を用いて生産力を高め、その生産物を交換して貨幣経済を盛んにし、さらに資本主義経済のもとで膨大な富の生産と蓄積の原動力となったことは先に見たとおりである。ここに私的所有の進歩的な役割があるのであるが、これに対して収奪される側の労働者にも彼ら自身の団結による組織的な私的所有の廃止運動が見られるのであって、そのような私的所有の積極的止揚はマルクスによって、「人間のためのまた人間による、人間的なあり方と生き方、対象的な人間、人間的な仕事、の感性的な獲得」である(マルクス『1844年の経済学・哲学手稿』邦訳前掲書、460 ページ)とも表現されている。この意味をより深く理解するために、われわれは再びヘーゲルへ立ち返ってみよう。

ヘーゲルは思想や思惟を最重視することから、言葉(言語)を人間の「内的なものが外化する」代表例としてあげることが多いが、彼は次のように述べている。「われわれが、われわれのもろもろの思想について知るのは、つまりもろもろの規定された現実的な思想を知るのは、ただ、われわれがそれに対象性の形式、つまりわれわれの内面性とは区別されていることの形式をあたえるとき、したがって外面性の、しかも同時に最高の内面性の刻印をおびているような外面性の形態をあたえるときだけである。そういうように内面的な

外面的のものであるのは、分節された音、つまり言葉だけである。それゆえ、言葉なしに思惟しようとすることは……一つの非理性として現れる。……言葉は思想にその最も品位ある、最も真実な現存在を与えるのである」(A.クレラ『マルクスの人間疎外論』藤野渉訳、岩波書店、50ページから引用)。

彼は精神の働きとして人間の自己産出過程を究明した『精神現象学』の中でも、「観察する理性」のCの1「人相術」に、内なるものの外面への「表現」について次のように述べている。「話しをする口、労働する手、そして人の好みにまかせて両脚をも加えてもよいが、これらはこれら自身において為すこととしての為すことを、言いかえると、内なるものそのものを自分で具えているところの現実化しつつあり完遂しつつある器官^{オルガン}である。しかるにこれに対して内なるものがこれらの器官によって獲得する外面性は、個体から分離せられた現実としての為されたものである。言葉や労働の成果は外化ではあっても、この外化においては個体はもはや己れを己れ自身において維持せず、また所持もせず、却って個体は内なるものを全く己れの外に出て行かせ、内なるものを他者のなすがままに放任している」(ヘーゲル『精神現象学』金子武蔵訳(邦訳ヘーゲル全集4巻)311ページ)。

また同じく「自己意識」Aの3「主と奴」に、労働について次のように述べる。「労働は形成するのである。ここに対象への否定的関係は対象の形相となり、そして持続的なものへと転ずる。……労働するというこの否定的な媒語または形成する行為も同時に個別態であり、言いかえると、意識の純粋な自分だけでの存在ではあるが、労働の成果となると、この自分だけでの存在も今や自分の外に出て持続するものの境地のうちに歩み入る」(同上、195ページ)。

ヘーゲルは人間の思考、労働、仕事を媒介とする内的人間諸力の産出行為。外在化、対

象化、物件化を、人間的発展のための重要な契機として把握しているが、その抽象的、理念的な思考方法のゆえに、あらゆる外在化、あるいは実体化に否定的な疎外因子を潜ませた。それは自己意識の内在的發展に動力を与えるためである。マルクスはヘーゲルの否定の弁証法を高く評価しながら、現実の感性的な人間活動と人間社会の現実の歴史にそれを適用した時、意識もまた人間の社会的生活の産物であること、疎外状況もまた一つの歴史的必然性を持つものであって、それらが意識や精神の問題ではないことを明らかにした。

「『精神』には物質が『憑きもの』だという呪いがそもそもの初めから負わされている。そして物質はここでは動く空気層、音、約言すれば言語の形式において現れる。言語は意識と同じほど古い。——言語は実践的な意識であり、他の人間たちに対しても現存するところの、したがって私自身にとってもそれでこそはじめて現存するところの、現実的な意識であり、そして言語は意識と同じく他の人間たちとの交流の必要、必須ということからこそ成立する」(マルクス『ドイツ・イデオロギー』邦訳前掲書、26ページ)。

人間自身の仕業が人間に対立し人間を支配するようになるからくりは、これまで自然発生的に発達してきた分業社会の中に人間が取り込まれることによっている。「各人は自分に押し付けられる何か特定の排他的な活動範囲をもつことになって、そこから抜け出ることができない。彼は狩人、漁師、または牧者、または批判的批判者であるかであって、命の綱を失うまいとすればそれをやめるわけにはいかない。……労働の分割によって必須となった様々な個人の協働ということから生じる幾層倍にもなった生産力、この社会的力はこれらの個人には、協働そのものが自由意志的ではなく、自然発生的であるがゆえに、彼ら自身の統一された力としては現れないで、なにか疎遠な、彼らの外にある強制力として

現れる」(同上, 29-30 ページ)。

そのうえで現実にある人間社会のもろもろの疎外的な状況の止揚を実践的課題として捉える場合、ヘーゲルが人間諸力の様々な形での発現や非有機的自然との交流、あるいは個人と社会の絡み合いなどに関して残した言及にも、また彼が触れることのなかった実践的な生産と生活の諸問題についても、真剣な唯物論的検討が加えられなければならない。以下では、疎外された労働と人間の本質の現実化とのかかわりについて考えたい。国民経済学の「疎外された」富の概念を理論的に止揚するためである。

資本主義経済の分析にヘーゲル的な方法を適用する場合、付加補足しなければならないのは、労働と自然とのかかわり、そして自然科学と産業の発展についてである。われわれは先の「5、疎外された労働」の章において、生産物からの疎外と、労働そのものからの疎外(自己疎外)、から引き出される「第三の規定」である「類的生活からの疎外」については僅かにしか言及しなかった。しかし初期マルクスによってよく用いられる「人間の本質」とか、「人間的なあり方」あるいは「人間的現実性の獲得」などの言葉の意味を明らかにするためには「第三の規定」に立ち入らなければならない。ここではヘーゲルが言及しなかった現実的な自然と生産の関係がマルクスによって展開されているからである。

「人間は一つの類存在である。……類生活は、人間の場合でも獣の場合でも、身体的に一つには、人間が(獣と同じように)非有機的自然によって生きるところにあるのであって、人間が獣として普遍的であればあるほど、それだけ彼の生きる素である非有機的自然の範囲は普遍的である。植物、動物、石、空気、光等々が、あるいは自然科学の対象、あるいは芸術の対象、——彼によってまず享受と消化のために調整されねばならないところの彼の精神的な非有機的自然、精神的糧として

——観想的に人間的意識の一つの部分をなすように、それらはまた実践的にも人間的な生活と人間的活動の一つの部分をなす。……自然は人間の非有機的な身体である」(マルクス『1844年の経済学・哲学手稿』(邦訳全集40巻)435-6ページ)。

自然は人間に食糧、燃料、衣料や住いなどの生活手段を与えるという意味でも、また人間の生産活動に材料や道具などの生産手段を与えるという意味でも人間生活に不可欠である。人間の肉体的および精神的な生活は自然と不可分にむすびついている。そして生産や生活は人間と自然の双方を相手とする意識的な集団活動、人間の類的な活動に他ならない。獣の生活は生存そのものであるのに対して、人間は自分の生活を意識の対象とし、自覚的に生活する。動物も自分の巣などを生産するが、それは自分たちの必要に迫られて生産するのであり、その生存に密着している。人間は必須品以外にも生産するし、その生産物に自由に立ち向かう。動物はその種の規格に合わせて生産するにすぎないが、人間はより普遍的な内在的な規格に従って生産するし、たとえば「美の法則に合わせて」生産することができる。

こうして自然の存在を前提とする対象的な周辺世界の加工において、人間は類的存在であることを示す。この自然を相手とする多様な生産こそ人間の活動的な類生活なのであり、これによって自然はますます人間の作品として第二の自然となり、人間的な自然となるが、この対象化こそが人間の本質諸力の現実化なのである。

マルクスは言う。「それゆえに労働の対象は人間の類生活の対象化である。というのは、彼は己れを、たんに意識におけるように知的にのみならず、また活動的、現実的にも二重化し、そうすることによって己れ自身を己れの創り出した世界のうちに観るのだからである。」(同上, 437 ページ)。

ところが疎外された労働は、人間から労働の成果を奪い、労働の内容を奪い、労働対象と手段をも奪うことによって、人間から類生活を奪い、自然を奪うのである。「同様にまた、疎外された労働は自己活動、自由な活動を手段に格下げすることによって、人間の類生活を彼の肉体的生存の手段たらしめ……人間の類的本質を——自然をも彼の精神的な類的能力をも——彼にとっての余所ものたらしめ、彼の個人的生存の手段たらしめる。それは人間から彼自身の体をも、彼の外なる自然をも、彼の精神的本質、彼の人間の本質をも疎外する」(同上、438ページ)。それらの直接的な帰結が「人間の人間からの疎外」となるのであった。

これまで見てきたように、疎外された労働の人間生活や活動への影響の範囲は広くまた深いのであって、私的所有のポジティブな廃棄とはただ何かの所有を回復してそれを享受するということにはならない。私的所有は人間を愚かで一面的にしてきたので、資本と労働の直接的関係が前面に突出し、われわれの対象があたかも経済的に役立つもの、あるいはより狭く衣食住の手段として利用できるものに限定されて理解されがちである。「この絶対的貧困への人間的存在のおし下げ」は、その内面的富をそれ自身から生み出してくるという歴史的役割を負っていた。しかしながら、所有の排除としての私的所有、資本として存在する私的所有の廃止は、あらゆる人間的なセンスと属性の完全な解放になる、とマルクスは言う。

「人間は彼の全面的なあり方を全面的なやり方で、したがって全体的な人間としてわが物とする。世界に対する彼の人間的対応の一つひとつ、見ること、聞くこと、嗅ぐこと、味わうこと、心で感じること、考えること、眺めること、肌で感じること、欲すること、働くこと、愛すること、要するに彼の個性のあらゆる器官は、直接に、形式上共同の器

官として存在する諸器官と同様に、それらの対象的な対応、あるいは対象へのそれらの対応において、対象の獲得なのである。人間的現実性の獲得、対象へのそれら諸器官の対応は、人間的現実性の証示である」(同上、460ページ)。

人間自身の諸器官がもつ身体的あるいは精神的な感受性をマルクスは「センス」と表現して、私的所有のもとで一面的に歪められていた諸センスがここではじめて全面的なものとなり人間的なものに変わるといふ。それは主体的な感受性ばかりでなく、客体となる対象においてもそうであり、人間の外に存在する人間的な自然、あるいは人間的な社会のなかに対象化されたものがそうなるのである。

したがって一方では、人間的な社会の中で人間の一つの力の対象化が人間的現実性の一つの実現となり、また別の力の発揮が己の実現となる。社会のなかでのあらゆる対象化は人間的な本質諸力の現実性となってくることによって、「彼にとってはあらゆる対象は彼自身の対象化、彼の個性性を確認し現実化する対象、彼の対象となってくる」。対象のなり方は対象の性質とそれに見合う彼の力の性質によって変わるとはいえ、あらゆるセンスをもって人間は対象的世界の中で肯定される。

他方では、主体的にこれを見るならば、ある個人がある対象に働きかける場合、その対象は彼の本質諸力の一つの証示であるに過ぎず、したがってそれは彼の力が主体的能力として自覚的に存在してはじめて対象たりうる。音楽の存在によって音楽を楽しむ耳が育ち、絵画の存在によって絵画を鑑賞する目が育つのである。マルクスは次のように述べている。

「人間的な本質の対象的に展開された富によってこそ始めて主体的、人間的な感性の豊かさ、音楽的な耳、形式の美を味わう目、要するに人間的な享受のできるもろもろのセンス、人間的な本質諸力たることを自証するもろもろのセンスがあるいは練り上げられたり、

あるいは生み出されたりするのである。けどしたんに五つのセンスのみならず、いわゆる精神的な諸センス、実践的な諸センス（意志、愛等々）、一言にしていうならば人間的なセンス、諸センスの人間性もまたその対象の存在によってこそ、人間的にされた自然によってこそ、始めてで上がるのだからである。……したがって観想的な点でも実践的な点でも人間的あり方の対象化が、人間の諸センスを人間的にするためにも、また人間のおよび自然的存在のまったき富に呼応する人間的なセンスを創り出すためにも、必要なのである」（同上、462-3 ページ）。

こうして私的所有が止揚された社会は、「その本質のまったき豊かさを具えた人間、あらゆるそして深いセンスを具えた豊かな人間をその社会の恒常的な現実として生み出す」（同上、463 ページ）のであって、その時代に成立するであろう「人間的な自然科学」においては、国民経済学の富の定義がすっかり変わることになる。「国民経済的な貧富（豊富と悲惨——藤野訳）に、豊かな人間と豊かな人間的必要とがとって代わることがわかる。豊かな人間とはとりもおさず人間的な生活表現の全体性を必要とする人間のことである。彼自身の現実化を内的必然性、止むに止まれぬこととして持っている人間のことである。人間の豊かさのみならず、また貧しさも等しく——社会主義の前提のもとでは——一つの人間的な、したがってまた社会的な意義を得てくる。この貧しさは、人間に、最大の富である他人というものの必要を感じさせる受動的な絆である。私のなかでの対象的存在者の支配、私の本質活動の感性的噴出は情熱であって、それがひいてはここで私の本質的活動となるのである」（同上、465 ページ）。

人間の内的本質諸力の発現は内的な、あるいは外から誘引される欲求に応じてなされる。ある人は物をつくり、ある人は歌をつくり、

またある人は思想を生み出す。それらの産物は外に出ることによって人間的な対象となり、他人を含む欲求主体の人間の本質諸力を実現させる。多面的で深い欲求を持つ人ほど人間の本質諸力を発現させまた享受することになる。他の人びとと直接共同で力を出し、また共同で享受する機会も増える。これができない他人の存在は私の情熱の対象となって、私の援助活動を促すというのである。

このような社会では物的な生産力の向上に支えられて精神的な生産力も上昇し、個々人の自由な活動が社会全体の物的・精神的な豊かさを増すであろう。このような社会はあらかじめ人間が計画的に生産や生活を管理する社会である。とはいえこのような社会の人間は他人と全体の幸福を常に優先する人間であり、能力的に多才であるが欲求そのものに社会性をもち権力志向から自由な人間である。個々人の自由な発展が社会全体の発展を促すのである。

このような人間的な社会の高みに立って、もう一度国民経済学の富の概念を一瞥しておこう。国民経済学は労働者の必要を「肉体的生命のぎりぎり不可欠な惨めきままる維持へ、そして彼の活動を極めて抽象的な機械的運動へ押し下げる」。彼らにとっては労働者のどんな贅沢も忌まわしく見えるのであって、「極度に抽象的な必要を超え出るものは——受動的な享受としてであれ活動の表現としてであれ——ことごとく彼には贅沢として目に映る」。国民経済学は労働者に、「己を捨てること、生きることとあらゆる人間的必要を断念すること」を求める。「食べ、飲み、本を買い、劇場へ、舞踏会へ、飲み屋へ行き、考え、愛し、理論を立て、歌い、描き、……等々をすることをしなければいけないほど、それだけいっそうお前には節約になるし、紙魚にも食われず強奪にもかからないお前の宝、お前の資本は大きくなる。お前は存在しなければいけないほど、お前は自分の命を表現しな

ければしないほど、それだけお前の持つところは多くなり、それだけお前の手放された[外在化された]命は大きくなり、それだけお前はお前の疎外された本質を多く蓄えることになる。……」(同上、470-1 ページ)。国民経済学は資本の立場を最優先する学問であり、労働者に対しては非人間的な一面発達と貧困を強要するものであることがわかる。このような経済社会の中で、労働者はどのようにしてその本質的な人間性を維持するのだろうか。

7、資本の「文明化」作用

マルクスは1850年代ロンドンにおいて本格的に経済学研究に没頭して、資本概念や労働力商品概念などの仕上げをしていく過程で、現実の資本主義経済の発展を目撃するとともに国際的な労働運動へも積極的にかかわり、イギリスの労働者たちが勝ちとった「工場法」の効果を確認して、1866年の国際労働者協会の大会において各国の労働者が法律による「8時間労働日」の確立のために闘うことを提案した。彼は『資本論』のなかで工場監督官報告書から次の文章を引用している。諸種の工場法は労働者たちを「彼ら自身の時間の主人とすることによって、ある精神的なエネルギーを彼らに与え、このエネルギーはついには彼らが政治的権力を握ることになるように彼らを導いている」(『資本論』邦訳前掲書②、135 ページ)。

マルクスは資本主義経済の仕組みが非人間的であることを厳密な論理を用いて明らかにしたが、そこに内包されている「資本の文明化作用」にも注意を払った。市場においては労働者もまた一市民として貨幣を所有し、資本家が生産する商品を買う立場にあることに関して次のように評価している。「どの資本家も、彼の労働者が節約するように要求するけれども、……その他の労働者の世界には決

して要求しない。なぜならそれらの労働者は、彼には消費者として相対しているからである。だから彼は……彼らを消費へと駆り立て、新たな刺激を彼の商品に与え、新たな欲望を彼らに押し売りする……本質的な文明の契機であり、資本の歴史的正当性とその現在の力の基礎となっているのは、資本と労働との関係のまさにこの面に他ならない」(マルクス『経済学批判要綱』高木幸二郎監訳、大月書店、210 ページ)。

また次のようにも述べている。「労働者がより高度な、また精神的な享受に参加すること、彼自身の利益のための刺激、新聞をとったり、講演をきいたり、子供を教育したり、趣味を向上させたり等、彼を奴隷から区別する文明への唯一の参加は、経済的には彼が好況時に、つまりある程度節約が可能な時期に、彼の享受の範囲を拡張することによって始めて可能である」(同上、209 ページ)。

マルクスは「資本論」への歩みを進めていく中で、資本の生産過程にとって最も重要な労働の生産力について研究し、労働能力への理解を深めていく。「労賃」はかつて剰余価値の搾取を暴露するために国民経済学とともに最低限に固定されていたが、現実には労賃の闘いの中で決まっていた。その現実の労賃と「労働力の価値」との関係についてマルクスは、現在『剰余価値学説史』としてまとめられている手稿の中で、「労働者たち自身は、賃金の引き下げ(価値から見ての)を阻止することはできないとはいえ、絶対的には最低限度まで押し下げられるものではなく、むしろ量的には一般的な富の増大の中のいくらかの取り分を強要する」(邦訳全集26巻Ⅲ、407 ページ)と述べている。

この関係がより明確に説明されるのが1865年の労働者向けの講演であって、その残されている英語の講演記録には、労働力の価値について「労働力を生産し、発達させ、維持し、永続させるのに必要な生活必需品の

価値によって決定される」(マルクス『賃金、価格、利潤』(邦訳全集16巻)131ページ)と述べ、労働力の価値を形成する二つの要素をあげて、生理的な要素については労働者階級の「生存と繁殖に絶対に欠くことのできない生活必需品」であるが、この生理的要素のほかに、労働力の価値は「どこの国でも伝統的な生活水準によって決定される」。これは「人々がそこに住み、そして育てられる社会的諸条件から生じる一定の欲望の充足である」(同上、149ページ)としている。そして「労働(力)の価値に入り込む歴史的または社会的な要素は、大きくすることもできれば小さくすることもでき、全くなくしてしまいうこともできる、労働力の価値は変数であって「われわれは賃金の最低限は決めることはできるが、その最高限を決めることはできない」、実際に賃金がどこに決まるかは、「資本と労働とのたえまない闘争によってはじめて決まる。……事態はけっきょく闘争者たちのそれぞれの力の問題となる」(同上、149-50ページ)と説明している。

『資本論』において、労働力の価値は労働力所持者の維持のために必要な生活手段の価値とされ、「生活手段の総額は労働する個人をその正常な生活状態にある労働する個人として維持するのに足るものでなければならない」、自然的な欲望は自然的条件によって異なるが必要欲望の範囲と充足の仕方は歴史的産物である、したがって「労働力の価値規定は、……ある歴史的な精神的な要素を含んでいる。とはいえ、一定の国については、また一定の時代には、必要生活手段の平均範囲は与えられている」(『資本論』第1巻、邦訳前掲書、300ページ)。と説明している。そしてそこに含まれるものとして子供の生活費や養成修業費をあげたあとに、労働力の価値の最低限について「肉体的に欠くことのできない生活手段の価値」として、労働力の価格がそこまで下がった場合には「それは労働力の

価値よりも低く下がることになる」(同上、303ページ)と述べて、その最高限について言及していない。

人間としての労働者の広義の生活過程(労働過程と消費生活過程)を経済的なカテゴリーとして厳密に規定しようとするとき、そこにはどうしても一定の幅を設けることが必要になる。労働力の価値の最高限度を労働力の順当な再生産費として設定したとしても、第一に人間の動物としての生命の弾力性と復元力によって、一日の労働時間の最大限は、たとえば労働生涯を短縮しかねない限界まで、一定期間延すことができるし、一日の生活費の最小限も、長期的な身体的精神的衰退をきたしかねない限界まで、一定の期間下げることができる。第二に、労働時間の限界は生産すべき使用価値と労働手段の変化に対応する具体的労働の発現に応じてある範囲で変化しうるし、また労働力の再生産費の下限についても、生産力の上昇を反映する消費すべき生活用商品の質的量的変化に応じて、ある範囲で変わらざるを得ないからである。もちろんここまで来れば労働力の価値以下への下落であるが、人間労働力の発現と人間労働力の再生産とはかくのごとく弾力性に富んだものである。

しかし資本家が労働時間の最高限と生活費の最低限を労働者に求めるのとちょうど同じような正当性をもって、労働者は資本家に対して労働時間の最低限と生活費用の最高限を求めることができるというべきであろう。なぜならば資本家が労働力商品を調達しようとする時、彼は労働力商品の価格の適度な低さもさることながら、それがもつ使用価値として最大の剰余価値生産能力を期待してこそ購入する以上、相手側の労働者が資本家に自分の労働力を買わせ、またその価値どおりに支払わせるためには、まず何よりも自分の労働力の使用価値の大きな可能性を認めさせ、また実際に労働過程においてより多くの剰余価

値を生み出すことを証明しなければならないからである。労働者は賃金を受取る前に労働力商品を前貸して、資本家に労働力を消費させるという事情がこれを必然的なものにする。労働者が自分の労働力を売るのは、それを萎縮・破壊するためでなく、それを健全に維持して市民としての生活を維持するためである。労働力が機械と違うのは、機械がその利用に比例して消耗しないのに対して、前者はいかに弾力性があるとはいえ一定の限度を超えれば急速に消耗して販売できなくなり、当人の生活を維持できなくすることである。

労働者が取奪された剰余労働時間に比例的にでなく、「それより大きな比率の賃上げによって過重労働を阻止しようとするのは、自分たち自身と自分たちの種族に対する義務を果たすだけのことである。労働者は資本の暴虐な強奪をおさえるだけである。時間は人間の発展の場である。思うままに使える自由な時間をもたない人間、睡眠や食事などをとる純然たる生理的な中断時間は別として、その全生涯が資本家のための労働に吸い取られている人間は、駄獣にも劣るものである。彼は他人の富を生産するたんなる機械であり、体はこわされ、心はけだものにされる。……資本は、もしそれをおさえるものがないなら……全労働者階級をこの極限の退廃状態に陥れることをやってのけるであろう」(マルクス『賃金、価格、利潤』(邦訳全集16巻)145ページ)。

資本が生産的である限り、労働者はその労働力を常に時代の要請に応えうる最高の質を持つものに育てあげて再生産し、自分の労働力商品が売れ残ることのないように努めなければならない。そのためには、最低限以上の、自分も子孫をもともに維持するに足る正常な生活に必要な質と量の物資を消費しなければならないばかりでなく、自分のための自由な活動もまた必須のものなのである。

したがってここでも、資本家と労働者は労

働力商品の価格をめぐって権利対権利の衝突に陥り、ちょうど労働日をめぐる闘いと同じように、「同等な権利と権利とあいだでは力がことを決する」こととならざるを得ない。資本主義の発生期にはいうまでもなく、16世紀の半ばから約200年続いた「本来のマニファクチュア時代」にも、資本は熟練労働者たちの「わがままと無規律」に悩まされ続けた。彼らはその数と力によって不熟練労働者の雇用に反対し、伝統的な労働時間と休憩時間、就労日と休業日に固執し、修養休業期間を維持し、そしてまた伝統的な家族の生活条件を守った。

機械の発明と普及によってその力は切り崩され平均的な生活水準は下がったが、工場における技師や設計担当など高級労働者や機械操作従事者、あるいは新規産業や高能率産業への就業者には平均以上の賃金が支払われ、「資本の文明化作用」は他の労働者生活にも影響していった。産業革命以降、工場の技術的基礎は革命的に変化し、そのたびに労働者はその機能や編成を反古にされて投げ出され、ある古い産業から他の新しい産業へと移動を余儀なくされた。同じようなことは景気変動によってもおこったが、そのたびに労働者は新たな職場を得て新たな生活を築き上げなければならないならなかった。彼らはその苦悩の中でも資本に抵抗する方法と思想を鍛え、交流し、広め、伝え続けた。彼らは労働組合や協同組合などによって就業者と失業者の計画的協力を組織し生活の安定をはかるなど、資本の下での即自的団結を自らの解放のための意識的運動へと発展させたが、それは自分たちの労働力を守り生活を守るための資本とのたえまのない闘いの中においてであった。

8、若干の結論

19世紀半ば以降イギリスにおける市場の拡大と大規模な機械類の充用による生産力の

増強、また労働階級の政治的な力の増大、そして色々な社会立法の拡大は、未曾有の商品量の増大とあまって人々の欲望を刺激し、消費生活を多様化して労働力商品の価値を高めた。オーエンが見抜いたように「人口法則」以上に生産力は早く増加したが、一方では資本の有機的構成の高度化が進行して三種類の相対的過剰人口＝産業予備軍が生みだされていった。産業予備軍はその底辺に窮民層を沈殿させつつ、その圧力によって就業者たちに長時間労働を強いるとともに労賃を労働力の価値以下に引き下げた。産業の種類が多様化にともなって労働階級の中にも多種多様な種類と階層が生み出されて、労働力商品の価値の幅は広がり、また現実の労働者間の労賃の開きはそれ以上に大きくなったのだった。マルクスは『資本論』第 1 巻第 23 章において、資本主義的蓄積の法則を次のように定式化した。

「社会的な富、現に機能している資本、その増大の規模とエネルギー、したがってまたプロレタリアートの絶対的な大きさとその労働の生産力、これらのものが大きくなればなるほど、産業予備軍も大きくなる。自由に利用されうる労働力は、資本の膨張力を発展させるのと同じ原因によって、発展させられる。つまり、産業予備軍の相対的な大きさは富の諸力といっしょに増大する。しかしまた、この予備軍が現役労働者軍に比べて大きくなればなるほど、固定した過剰人口はますます大量になり、その貧困はその労働苦に反比例する。最後に、労働者階級の極貧層と産業予備軍とが大きくなればなるほど、公認の受救貧民層もますます大きくなる。これが資本主義的蓄積の絶対的な一般的な法則である」(『資本論』邦訳前掲書③、239-40 ページ)。

これは眼前に展開する経済社会を長年分析し、厳密な論理展開を重ねた上での当然の結論であったが、この結論はまた、ヘーゲルが先に暴露した市民社会の根本的な矛盾、すな

わち「市民社会は富の過剰にもかかわらず十分には富んでいないこと」、「貧困の過剰と賤民の出現を防止するに足るほど持ち前の資産を具えてはいないこと」の合理的な説明でもあった。

そしてヘーゲル市民社会論の下地となっていた国民経済学は、労働者階級の失業や貧困を「人口法則」にもとづいて説明していたのであるから、これは国民経済学への決定的な批判でもあったのである。

マルクスはこの後に、資本主義的生産体制のもとでは労働の社会的生産力を高めるための方法は、ことごとく個々の労働者の犠牲において行われることを想起させたうえで、「資本が蓄積されるにつれて、労働者の状態は、彼の受ける支払がどうであろうと、高かろうと安かろうと、悪化せざるをえないということになる」。相対的過剰人口の存在は労働者を資本に釘づけにする。「それは資本の蓄積に対応する貧困の蓄積を必然的にする。だから、一方の極での富の蓄積は、同時に反対の極での、すなわち自分の生産物を資本として生産する階級の側での、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道徳的墮落の蓄積なのである」と結論した(同上、241 ページ)。

この部分が後に「貧困化理論」として大いなる研究対象となり、様々な議論を呼んだのだが、ここでわれわれが問題としたいのは、先の文章冒頭の「社会的な富」、文章半ばに見られる「富の諸力」、そしてこの反対概念として用いられている「貧困」と「労働苦」という表現である。また同じ文脈のなかに「他人の富の増殖または資本の自己増殖のために自分の力を売る」という表現も見られる。この「富」を労働者はどう受けとめるべきかということである。

資本の支配のもとで労働者が生み出した富は全機構的に「資本の富」となるが、その一部は労賃の支払いを通して労働者の生活資料となる。つまり社会的富の一部は可変資本と

して労働力商品の購入にあてられ、労働者家族の生活資料の素材となる。労働者は資本の支配の下で人間的な労働支出と正常な消費生活を維持するために、たえず資本と闘ってこの可変資本部分を「労働財源」として拡大しようと努め、一部それを獲得して辛くも人間的な資質を維持発展させてきたのであった。「巨大な商品の集まり」である社会的な富は生産財と消費財からなるが、消費は貨幣を媒介として行われることから、富のこの部分は資本家と労働者に共通に開かれる。労働者の欲望は刺激されるが労賃が低いという制約はその全面的満足を許さず、質のよい商品の一部が徐々に労働者生活にも流れ込む。この点から労働者もまた商品や貨幣を自分の富として受け入れその増大を求める。

しかし貨幣を得るための日々の労働の経験から、労働者は身体や精神を萎えさせるような労働をなるべく控えて、自分を守るようになる。また少ない労賃であっても商品の消費を慎重に選び、自分なりの喜びや余裕を持つようとするようになる。資本家にとって富は依然として豊かな財や貨幣を持つことであるが、資本家と闘うなかで労働者は資本家とは違った富の概念を育てていくようになるのである。

労働階級にとって真の豊かさとは、富の生産のために労働力を萎縮させることではないし、日々つくり出す富の享受から排除されることでもない。ヘーゲルに習って富を主体的に把握した場合、労働階級にとって真の豊かさとは人間的に労働し、多様な生産物を生み出して交換し、また人間的な享受をすること、つまり労働と享受の統一によって内在的な人間的資質を発展させることである。人間にとって富とは豊かな生活の手段に限定されず、それを享受する人間そのものの豊かさのことなのであり、一定の労働生産力を前提とした自由時間の拡大による人間的諸能力の多面的な発現、社会的に有意義な多方面への多様な活動の展開のことなのである。

資本主義的生産関係の敵対的性格は、一方で資本家的な富の概念を維持しながら、他方では新しい富の概念を成立させざるをえない。社会的労働の生産力の発展とともに、人間の具体的有用労働の総体は物的な富として外在化するものの範囲を超えだしていく。科学・技術・芸術・宗教などにかかわる労働、あるいは保育・教育・サービス・医療・リハビリテーション・介護などにかかわる労働、総じて自己実現的活動と、対人サービスのな労働そして自然に対する保全的労働の増大である。それらは多様な物質的手段によって媒介されるとはいえ物質的富として対象化されるとは限らず、人間と自然そのものを癒し、修復しまた発展させるための制度や文化的な力として、またそれを担い社会的に発現させる人間的な能力として維持・保全され、発展させられなければならないものである。

労働の社会化の進展は、多くの人間的必要労働領域への資本の進出とその支配を拡大しているが、資本はこの領域でも過酷な収奪的・抑圧的・萎縮的な労働を強要している。反面で資本は、利潤の追求という制約によって、人間の社会的必要労働の全部門をカバーすることはなく、また不十分にしかニーズにこたえず、逆に人間全体にとって不必要な奢侈や欠陥品や害悪商品を普及させている。それは資本主義的富の生産ではあるが、正常な人間活動と真の人間的な豊かさを発展させるものではない。

人間的富とは、社会的な人間を真に発展させる諸活動とそのための豊富な手段ということになり、一方では対象化した資本主義的富の範囲をこえ、他方では不必要な奢侈品、害悪品をふくまないものとなる。人間的な豊かさをすでに初期マルクスがそう考えていたように、人間活動をも含めて広く解釈すれば、貧困化とは、資本主義的富の生産という制約によって、真の人間的富たる自由で多面的な活動とその発展の源泉がますます損なわれて

いくことと考えることができる。

それでは資本主義的富の蓄積に対応する貧困の蓄積は、この関連の中でどのように位置づけられるであろうか。それは資本主義的貧困の諸様相を具体的に示している。マルクスが、国民経済学を批判して、一方での富の蓄積は、その対極では、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道徳的墮落の蓄積だと述べたとき、これは資本主義的生産様式の敵対的な性格を指摘し、市民社会における労働者階級の労働と生活上の諸困難を表現するものであったが、それは同時に、近代社会の理念である人間の自由な全面的発達、主体的な活動を含む人間的富の発展という歴史的立場から見れば、それらの諸現象がいずれも諸個人の生産諸力の全面的、普遍的な発現とその発展に対する障害となり、ますますそうなることを表現するものである。

マルクスは『資本論』の準備草稿の中で次のように書いている。「真実の経済 [die wirkliche Oekonomie] — 節約 [Ersparung] — は労働時間の節約（生産費用の最小限への縮減）にある。だが、この節約は生産力の発展と一致している。だからそれは、享受を断念することでは決してなく、生産のための力 [power]、能力を発展させること、だからまた享受の能力をもその手段をも発展させることである。享受の能力は享受のための条件、したがって享受の第一の手段であり、またこの能力は個人の素質 [Anlage] の発展であり、生産力である。労働時間の節約は自由な時間の増大、つまり個人の完全な発展の

ための時間の増大に等しく、またこの発展はそれ自身がこれまた最大の生産力として、労働の生産力に反作用を及ぼす」（マルクス『資本論草稿集』2、大谷・森下他訳、大月書店、499ページ）。

「真の経済」は疎外された経済の止揚を前提にしているとはいえ、決して夢想された理念なのではなく、資本主義経済の発展の中からその主体的ならびに客体的な条件が生み出されてきている。長年にわたる解放闘争の成果として、労働階級は参政権を獲得し政治過程への参加を実現したが、その力がもたらした政治的民主主義の発展とともに、漸進的に真の経済を現実的なものにするための理論と運動が発展してきた。

人民の安全と健康を守ろうとする運動から資本の営利活動を規制する社会立法が生まれ、労働者の自由と生活を守ろうとする運動の中から労働立法が整備されてきた。人民大衆の自由と健康を守り発展させようとする理念と運動は国連はじめ世界的に受け入れられており、これとは反対に資本の自由を拡大する動きも部分的・一時的には見られるが、大勢は動かしがたく、現在でも人間的で先進的な文化を普及させようと活躍する各種の文化団体、直接的に公共の福祉を担うための公営企業体、あるいは構成員の民主的参加と協働を目指す各種の協同組合等が活動を続けているし、最近ではそれらに加えて非人間的な社会を改善しようとする多くの非営利団体（NPO）が出現し活動を広げているところである。